支部だより

長野支部
大成功の移動大学

井上<小林>裕子（E昭60）

東京外国語大学としては初の「移動大学」が9月14日（土）午後1時半から長野市の県立長野高校で開かれた。参加したのは、同校の生徒のほか、父母、学校関係者、外語会長野県支部のメンバーなど約百人。会場の会議室にぎっしりと並べられた椅子が埋まり、生徒たちの期待と意欲がひしひしと感じられた集いとなった。

「移動大学」の目的の一つは、地方在住でなかなか東京の大学の生の情報が得にくい高校生、一般の人たちに、東京外国語大学の目指すところ、豊富なカリキュラム、大学の魅力を伝えることにあるという。

第二の目的として、大学の教官、卒業生の持っている知的資産を地方に還元するということがあるという。今回は高校側の希望も踏まえ、長野県茅野市出身で、ロシア語科卒業後にNHKに入局し、モスクワ支局長、解説主幹など華々しい活躍をされた小林和男氏（作新学院大学教授、NHK外部解説委員）の講演が実現した。

第三の目的は外語会支部との関係強化。今回、初の「移動大学」を開催する恩恵を長野支部が受けた。塩沢鴻一支部長の指示のもと、支部のメンバーが運営のお手伝いをした。

この日、大学の説明に立ったのは、東南アジア課程ベトナム語専攻の今井昭夫助教授（学長補佐）。東外大は26の専攻語を持つ語学中心の大学だが、後期の三、四年生では3つのコースに分かれて社会学、国際関係論、文化研究など幅広い学問に取り組めることなどを説明し「語学だけではない大学であることを理解してほしい」と強調した。また、教育を通して目指す人材として、異文化理解をさらに深めて「地域の人々と対話、議論ができるタフ・ネゴシエーターを養成すること」と話した。熱心に耳を傾ける学生たちにとって刺激的な言葉が並んだ。

初の移動大学

「体験で語る」と題した小林氏の講演は、さらに生徒たちにとって刺激的な内容であった。移動大学直前に洪水のように続いた「9・11」報道。その中で、「何が欠けていたのだろうか。ちょっと考えておいてくれ」という問いを投げかけて、講演は始まった。

「言葉の力は偉大だ」。これは東外大卒業生ならだれでも感じていることだろう。それを小林氏はジャーナリストとして豊富な経験、特にゴルバチョフ大統領時代のソビエトでの経験などをベースに迫力を持って語った。

茅野で過ごした高校生時代、「世界に出ていきたい」と願っていた小林氏は、ソ連の人工衛星打ち上げ成功の報に接してロシア語科受験を決めたという。NHKに入局後、念願かなってモスクワ特派員に。そこで6歳の男の子から「おじちゃんどうしてロシア語が少しだけできるの？」と尋ねられたことが、語学のスキルアップの原動力になったという。生きた言葉の習得は現地で生活することが一番

だが、やはり4年間の学びは大きな成果を挙げた。当時は情報公開（グラスノスチ）を目指していたゴルバチョフ大統領。共産主義を賞賛する報道に慣れていたソ連のジャーナリストに代わって、記者会見で手厳しい質問をする外国人記者たちを大統領は重宝した。英語で質問する欧米の記者に比べ、ロシア語で堂々と質問する小林氏の存在は光った。そうした地道な交流が、1986年、アイスランドのレイキャビックで行われた米ソ首脳会談後の記者会見で大きな成果を挙げた。米国の「スターウォーズ計画」を巡って会談は決裂。結果に怒って真っ赤な顔をして登場したゴルバチョフ大統領は、記者会見場の中央に陣取った小林氏の質問に答えて「この会談は失敗ではなく、突破口だ」と答えた。「この記者会見がその後の米ソ関係の流れを決める重要なものになった」と小林氏。

さて、冒頭に投げかけた問い。「9・11」報道に欠けていたものについて、小林氏は「どうしたら再び繰り返さないかという視点に欠けている」と指摘した。米国中心の情報を垂れ流すだけでなく、イスラムの人の心を理解し、なぜあの事件が起こったかを考える必要があると述べた。

1980年のイラン・イラク戦争勃発に遭遇した時、小林氏は現地の映像を世界で初めて発信することに成功した。日本の他局の記者ができなくて、なぜ彼が成功したか？後年明らかになった理由は、他局記者がイラン人スタッフを罵倒して恥をかかせたため、協力しなかったという。イスラムの人々は先祖が受けた辱めも忘れない。そして、ビンラディンがソ連のアフガン侵攻に対抗して、米国支援の義勇兵として活躍しながら、その後冷遇されたことを考えれば、なぜこの事件が起こったか、どう対処すべきかを考えることができる。そうした視点が報道にも必要だと語った。

講演後生徒からは「この時代に日本人はどんな役割を果たせるか？」といった熱のこもった質問も出された。長野高校の高野忠夫校長は「一線で活躍している人の生の話を数多く生徒に聞かせたいと考えていた。小林さんの話は本物の迫力が感じられた。多感な生徒たちが得るところは多く、とても感謝している」と成果を語っている。本場の熱気が伝わる話に、生徒たちも大人も最後まで引き付けられたひとときだった。

(信濃毎日新聞文化部記者)

長野支部総会と講演会のお知らせ

岩下　隆（C昭45）

日時：11月9日（土）15時～18時
場所：ホテル信濃路
講演会(公開)「日中関係の展望」（仮題）
講師：中島　宏氏（C昭33）元共同通信北京支局長、現大東文化大講師
総会･懇親会：会費5千円
連絡先　TEL/FAX 026(244)8574　岩下隆

ウズベキスタン支部

中嶋浩介（IM平3）

首都タシケントは美しく可憐である。夏、道路沿いの溝には、透明で冷たい水が流れ、秋、コスモスが咲き、木々が紅葉を始める。冬、空気が澄み、雪を冠ったキルギスの山々が見渡せる中、散歩が気持ち良い。寒くなれば、路面電車に飛び乗り、揺られるのも良い。そして、春、桜そっくりの杏の花が咲き乱れる。

アフガニスタンの隣にあり、「スタン」がつくためウズベキスタンは危ないとのイメージをもたれがちだ。確かに、1999年にはタシケントで爆破テロがあった。しかし、独立以来その地位にあり、2002年の国民投票で任期を5年から7年に伸ばしたカリモフ大統領の権力基盤は強く、国内の治安は安定している。

こそ泥の話を聞くぐらいで、恐い思いはない。タクシーは白タクばかりだが問題は皆無。庶民は誠実で深い思いやりを持っている。

ある日本人から「危ない場所と思ってくれているのなら、そのイメージを壊さず、ずっと穴場的存在でいてくれたらなあ」などという発言が出るくらいだ。

経済はにっちもさっちもいっていない。月々

20ドル程度の給料しかない庶民の暮らしは楽ではない。通貨スムは切り下がり物価は上がっている。

ビジネスマンの声は厳しく「考え方はソ連のまま」「法律はあってもそれが実行されない」「国内市場は購買力弱く、近隣に大きな市場がない」「ダブルランド・ロックト・カントリー（海に国境を２つ越えないと到達しない国）であり、とにかく遠い」等々。イタリア資本のジュース工場、イスラエル資本の農場などがあるものの大規模な外国投資は出にくい状況だ。

国内に金がないのか、資産の配分に問題があるのか。大金をかけタシケントにモダンなビルを建てたり、３本目となる地下鉄の新線を作ったり、自動車組立工場を作ったりしているが、「もっと必要なことがある」とささやく人は多い（大っぴらに政府批判はできない）。それらの批判は百も承知で政府は外国人に「投資をしろ」と呼び掛けてくる。

政府は今、為替制度などの改革をIMFの助言を得て実行中。為替自由化で貿易赤字が膨らんだ分を資本の流入でカバーしたい腹だ。若い経済人は「隣国カザフスタンは随分前に改革を実行、一時経済は落ち込んだが今は活性化した。我が国は遅い」と批判する。

ある国際機関の事務所長は「経済が一時落ち込んでも、外資が来て人々が豊かになるのだから良いじゃないか」と割り切る。改革のデッドラインは2002年末。果たして改革は約束通り実行されるのか。そして、その後、社会はどう変わるのか。

こんな中、タシケントには邦人が約120人。外大出身者は大阪外大含め13人。2002年５月に外語会を結成。様々な業界の人がいて、美味しいシャシリク（羊肉等の串焼き）とウオッカで、２カ月に１度のペースで賑やかな会を行っている。

ロサンゼルス支部

川口輝明（A昭51）

2002年６月９日に家族を含め総勢22名の参加を得て、トーランス･ホリディインホテルにて親睦会を開催しました。最古参の真井三男さん（R昭24）から最年少の甲斐俊一郎さん（Po平10）まで、世代を超えた同窓生が集い近況報告や情報交換を行い、和気あいあいの楽しいひと時を過ごしました。今回の参加者は上記２名のほかに、妙中俊彦（C昭25）、黒木亨（M昭35）、高柳貞夫（E昭36）、北神＜杉浦＞由子（S昭40）、小林正子（R昭41）、宮田慎也（V昭45）、川畑昌信（C昭46）、堀川照一（C昭50）、川口輝明、森寿久（A昭51）、森＜原田＞節子（A昭51）、阿久澤剛樹（E昭62）、阿久澤＜吉本＞淳子（I昭62）、武藤祐司（Po平2）でした。 また、これに先立ち６月１日にLAで開催されました第18回南加大学同窓会対抗ゴルフトーナメントで、我らロサンゼルス支部は５名のグロススコア合計で優勝を競う団体戦に初出場し、18チーム中12位の成績（合計475点）を収めました。この成績は国立大学チームではトップであります。出場選手は、榎善昭（F昭40）、柳島亨（E昭44）、宮田慎也、川口輝明、庄野晃彦（IP 昭61）の５名でした。次回の親睦会は2003年２月を予定しております。 ロサンゼルスにおられて未登録の同窓の方は宮田会長 shinya_miyata@asatsuamerica.com にご一報ください。

ロンドン支部

小倉正広（D昭57）

夏のロンドン外語会が７月23日（火）開かれました。当日は教育学の小澤教授の飛び入りと指揮者村中大祐氏（D平2）の参加もあり、総勢22名と大盛況でした。会場のThe Old Bank of Englandは、 Royal Courts of Justice（王立裁判所）の右隣りにあり、由緒ある銀行の歴史的な建物を思わせる、雰囲気のあるパブのファンクション・ルームでした。

ロンドン外語会では先生方のご来訪を心よりお待ち申し上げます。また同窓生の皆さんの参加も大歓迎です。短期間のご滞在中でも是非ご参加ください。

出席者： 小澤周三名誉教授（教育学）、原田豊（S昭40）、蓮見幸輝（E昭41）、トンプソン桃子（R昭45）、荻野偵也（F昭46）、辻光枝（R昭48）、西村昇（C昭50）＆裕紀子夫人、ブライアン＜佐々木＞恵（E昭53）、米＜平野＞布由子（S昭54）、小倉正広、持田譲二（D昭59）、長谷川健司（Pr昭60）、石丸慎司（S昭61）、大谷＜河合＞真理（U平1）、石野斗茂子（E昭63）、安井＜猪瀬＞純子（C平1）、村中大祐、岩本克巳（Po平2）、チャンドラー（吉村）麻実子、（R平12）保志茂寿（J平7）、森丘直子（R平9）

盛会の夏のロンドン外語会

ジャカルタ支部

黒木賢治（Ic平1）

8月29日ジャカルタ支部総会が開催され、坂本英雄会長（IM昭41）から関根英治新会長（IM昭47）に交代しました。坂本氏は約3年間にわたりご尽力いただきました。引き続きジャカルタに滞在の予定ですが「世代交代と若返り」を図ってバトンタッチされました。また近年のOG在住者の増加に伴い、女性参加者の拡大を目的に、従来の幹事1名体制を2名増員することに決定し、中島真紀さん（IM昭58）作間＜小川＞佐知子さん（S平3）が就任しました。これにより体制は会長関根、幹事中島、作間、黒木の各氏となりました。総会出席者は以下のとおりです。

坂本英雄、松枝文夫（Ic昭42）、杉山千八八（C昭46）、関根英治、横関岩男（C昭47）、中村一男（E昭55）、中島真紀、亀谷岩男（IM昭58）、米田実（E昭59）、作間正人（In平1）、作間佐知子、黒木賢治

訃　報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心からお祈りいたします。（敬称略）

E昭 2	秋山平吾	2002. 2.26	D昭15	横川文雄	2000. 4.13	C大14	生田一正	1995. 3
E昭12	浜田克己	2002. 5.19	D昭16	田丸芳郎	2002. 4.12	C昭 9	豊田賢一	1991. 8.13
E昭15	山本正治	2001. 1.11	D昭19	西村正民	2002. 4.18	C昭16	楠田太郎	2002. 1.26
E昭21	石原栄夫	2、3年前	D昭28	上法　高	2001. 7.12	C昭18	内藤善明	2002. 5. 6
E昭23	和野佳和	1999.10.21	D昭29	北島克一	2002. 2. 9	C昭25	平林千秋	
E昭25	倉林民男	2002. 5. 5	R昭11	森田安雄	2002. 5.30	C昭29	管野一男	2001.12
E昭30	岡野次男	1999. 6. 3	R昭14	池田博行	2002. 3.25	C昭48	加納　登	2002. 3.12
F昭16	石神久次郎	2002. 2. 6	R昭15	甲斐原文夫	2002. 4. 6	M昭12	田浪丈夫	2001.11
F昭28	倉田　清	2002. 7. 6	R昭29	内田重次	2000.10.27	M昭26	雨宮岩男	2002. 2.15
F昭36	小川特明	2002. 6. 7	R昭36	小川和男	2002. 7.19	In昭24	加藤　功	5年前
F昭49	安本晴雄	2001. 7. 8	S昭14	山崎友衛	2002. 5. 1	Ic昭20	服部　勝	2002. 5. 6
I昭14	酒井正敏	2002. 1. 9	S昭15	原田陸奥夫	2000.12.27	Ic昭23	渡辺　晋	1998.10.15
I昭29	玉木浩一	2002. 7. 3	S昭22	野田重康	2002. 5. 7	Ic昭23	五十嵐任克	2000. 6. 9
D大12	野沢仁三郎	1975. 1.15	S昭25	森田　茂	2002. 7	Ic昭35	仙波充方	2002. 5.13
D昭13	金井守次	2001. 7.19	S昭37	蓮沼洪迪	2002. 6.30	J昭53	Joan Marie Waring	